

分析批評による教材研究の方法 ——「なめとこ山の熊」への適用——

横山 明弘

序

分析批評は1958年小西甚一氏によって命名された、表現分析を中心とした総合的な批評の方法である。これは1920年代から1950年代にかけてアメリカで流行したニュー・クリティシズム（新批評）の成果を取り入れたものである。その特徴を小西氏の文章からまとめてみることにする。

ある作品から強い感動を受けたとき、どうしても自分ひとりの胸に収めておけなくなり、誰かにその感動を語りたくなる。批評の本質は〈語りあい〉であり、作品そのものについての〈語りあい〉を通じ、新しいことに気づき、作品の理解や感動を深めることが、批評の第一義である。そこで他の人たちと〈共通の言葉〉で、作品を分析することが必要となる。

分析批評は歴史的・社会的コンテクストのなかで表現をとらえ、深層心理学や人類学から原像（archetype）の観点を学び、きわめて多角的なものになっている。つまりさまざまな角度からなる研究を尊重しながら、それらを統合する中心に表現分析を置くのである。周辺となるさまざまな研究は表現分析と言う中心をもつことにより、それぞれすぐれた機能を発揮できるし、中心となる表現分析は周辺にさまざまな研究の堅めをもつとき、むしろその深みを増す¹⁾だろう。

国文学界に導入しようとしたこの小西氏の分析批評は、井関義久氏によって1972年まず高校の文学教育に紹介された²⁾。私も分析批評の方法を文学教育に導入することの有効性を信じる者である。上の引用を整理しながら、その根拠をいくつかあげることにする。第一に分析の観点を共通の言葉で表わすことによって、生徒同士の対話を開き、理解や感動を深めることができる。第二に他の関連する学問の成果を取り込む柔軟性と発展性を内包している。第三に作品の表現分析を中心に置いているので、歴史的背景や伝記の事実などに関する研究成果を重視する知識の注入的な授業と異なり、生徒が技術用語を覚えれば独自に批評することができ、認識力や表現力を鍛えることができる。

ところで分析批評において注意しなければならないことは、ただむやみに分析すれば良いと言うのではなく、主題との関連において意味のあるものを分析の対象としなければならない点である。つまり主題を最初に抽出しておき、それがどのように効果的に表現されているかという観点から分析し、話主・視点・人物など各要素についての分析が、主題を中心にできるだけつながりをもつように為されなければならない。したがって授業は仮説・検証型となる。

この論文においては、1989年勤務校の高一生を対象に行なった授業実践を交えて、「なめと

「山の熊」の教材研究に分析批評を援用した試みを発表する。

1 素材と題材と主材

素材とは、作品化される以前の事実や史料のことで、この作品では〈マタギの生活〉がそれにあたる。

石川純一郎氏によるとマタギとは秋田県を中心に存在する狩猟専門集団で、狩場に入ると山の神を祭り、言動を慎んで狩詞を用いるなど、一種の宗教的な生活に移行する。特有の猟法で雪山に野獣を狩り、獲物の体毛または心臓などの内臓によって捕獲儀礼を営む。この捕獲儀礼がマタギにとって重要な意義を有しており、マタギが仏教戒律の殺生という行為をしながらも、自他共に穢れているとみなさないのは、この捕獲儀礼に起因している。マタギは儀礼を誇りにしているということである。³⁾

小十郎は後述するように、熊を殺すことへの罪の意識を常に保有しているもので、この点においてマタギとまったく異なっている。宮沢はマタギの生活を描きながらも、独自の思想を表現したということである。宮沢がマタギの生活習慣に関して、ある程度知識をもっていたことは、次の詩を残していることによってわかる。

・じぶんの腕で食ってみせると／古いスナイドルをかつぎだして／首尾よく熊をとって
くれば／山の神様を殺したから／ことしはお蔭で作も悪いと云われる（「春と修羅補遺」）

題材とは、素材に対してその中から選択され、作品の中に表現されている事柄である。この作品においては、〈熊捕りの名人〉（導入部）、〈母子の熊との出会い〉・〈荒物屋の主人による搾取〉・〈熊の自己犠牲的行為〉（展開部）、〈小十郎の死と熊による葬送〉（結末部）となる。

校本全集の校異によると、母子の熊の場面と自己犠牲をする熊の場面とは連続していたが、作者がそこに荒物屋の場面を挿入したということである。後述するが小十郎は自死に近い死を遂げる。その死を促したのが熊の自己犠牲的行為なので、小十郎の死の直前に熊の自己犠牲的行為を置くこの改編には頷くことができる。だが荒物屋の場面の冒頭部「ところがこの豪儀な小十郎が」と自己犠牲の熊の場面の冒頭部「こんな風だったから」は、作者が手を加えていないので、その前の部分と不自然な繋り方になっている。

主材とは、全体を引き締める中心的な事柄で、作品の全体にわたって繰り返して出てくるものである。

小十郎は導入部で「・・ほかの罪のねえ仕事していんだが・・」と、自分が撃ち殺した熊に語りかける。展開部では母子の熊と出会い、熊の幸福を奪う自分の罪の意識を深める。また荒物屋の主人に安く毛皮を買いたたかれ、「ほんたうに気の毒」だと後に自死する熊に語っている。そして結末部においては、「これが死んだしるしだ。死ぬとき見る火だ。熊ども、ゆるせよ。」と小十郎は謝罪しているので、主材を〈熊を殺すことへの罪の意識〉とすることができる。

2 主題と趣意

主題とはある作品の中心となり、全体を支配している思想で、はっきりと述べられる場合もあるが、普通は言外に含まれている。それを陳述の形で表わしたものを趣意と言う。

「なめとこ山の熊」に関する従来の見解を紹介しておく。古いところでは和田利男氏が「『なめとこ山の熊』の中には、仏教に関する言葉もなく、説教じみたところもない。それにもかかはらず、この作品が大乗仏教の境地から生まれたものであり、従ってそこから受ける感動が宗教的な深みを具へてゐることは、誰もが感得出来ることであろう。」と述べており、私もこの作品から仏教的思想を読むことに主眼をおいている。

続橋達雄氏は「この作品の標題は、『なめとこ山の熊』であって『淵沢小十郎』ではない。すなわち、熊と小十郎との交流が主題であり、町の旦那と小十郎との交渉は副次的テーマになっている。」⁵⁾と述べる。後述するが荒物屋の主人と小十郎との交渉を副次的テーマとして、取り出すことには異論がある。

++ 中村稔氏は「これは、小十郎をそういう境遇に追いやった社会に対する抗議の説話である。」⁶⁾と述べている。確かに作者は小十郎に「・・・里へ出て誰も相手にしねえ。・・・」と語らせている。だが私はこの作品の思想の焦点は社会批判にあるのではなく、人間を含めた生物全体の根源的な問題である弱肉強食にあると考える。

ところで私が主題を導く上で重視しているのは、次のようなL・T・ディキンソン氏の言葉である。

・・・その作品の中の人物がどのような葛藤を持つか、それがどのようにさばかれるかを見ることによって作者の世界観について多くを知ることができるのである。⁷⁾

葛藤とは二つ以上の対立する傾向（衝動・要求など）がほぼ等しい強さで同時に存在し、行動の決定が困難な状態をいう。（新版心理学辞典 平凡社）多くの作品には葛藤が描かれており、葛藤の分析を中心に据えることによって、主題に到達することができるのではないかと私は考えている。このことについてはまだ多くの実践を試みる必要がある。その方法として作品の導入部においては、そこに提示されている葛藤を読みとり、展開部においてその葛藤の具体化・深化の過程を、結末部において葛藤がどのように解決されるかという観点から読む。では具体的に作品を見ていくことにする。

「熊。おれはてまへを憎くて殺したのでねえんだぞ。おれも商売ならてめへも射たなけえならねえ。ほかのつみのねえ仕事していんだが畑はなし木はお上のものにきまったし里へ出て誰も相手にしねえ。仕方なしに獺師なんぞしるんだ。・・・」

ここでは小十郎の熊を殺したくないという気持ちと、九十になる年寄りと子供ばかりの七人家族のために、商売として熊を撃たなければならないという気持ちが引き裂かれ、罪の意識が提示されている。

この導入部における小十郎の葛藤や罪の意識が展開部に入り深化していくのである。母子の熊の会話の場面では、熊の親子にも人間と同じように美しい情愛の世界があるのに、自分はその破

壊者ではなかったかと、自分を見つめている小十郎の姿を読むことができる。自分が存在しなくなれば、熊にとって幸福であるというこの作品の基調が、「風があっちへ行くな行くなと思ひながらそろそろと小十郎は後退りした。」という描写に暗示されている。荒物屋に毛皮を売りに行く場面では、主人に軽くあしらわれ、安く買いたたかれてしまう。熊に対して強者であった小十郎がここでは弱者となって、荒物屋の主人に搾取されることになる。またこの場面を描くことによって、小十郎が熊を殺す意味が薄れ、無益な殺生であることが強調される。

「あゝ、おれはお前の毛皮と、肝のほかにはなんにもいらぬ。それも町へ持って行ってひどく高く売れると云ふのではないしほんたうに気の毒だけれどもやっぱり仕方ない。・・」
にもかかわらず自己犠牲の熊の場面では、自分と約束をした熊が二年後それを守って、身を投げだしてくれたのである。口から血を吐いて倒れている熊に対して、「小十郎は思はず拜むやうにした。」と描かれている。このとき小十郎の罪責感は押さえることが出来ないほど、深まったのではないかと思われる。

家族を養わなければならないとはいえ、人間と同じように情愛を持ち、犠牲的行為までする熊をなぜ殺し続けなければならないのか。さらにその犠牲によって得たものは搾取されてしまう。これが小十郎の葛藤であり罪の意識である。そして結末部に至り、熊に殺されることによって、この葛藤や罪の意識から逃れることができたのである。

ところで小十郎の熊を殺すことに対する苦しみと荒物屋の主人に搾取される苦しみを弱肉強食の世界に生きる苦しみとまとめることができる。作中にも次のような説明がある。

けれども日本では狐けんといふものもあって狐は獵師に負け獵師は旦那に負けるときまってくる。

この弱肉強食の関係は宮沢の文学にとって非常に重要なテーマであって、その定義の仕方によって多少違ってくるが、この問題を扱った作品は私の研究では十五作品ある。国語辞典によると弱肉強食とは弱い者が強い者のえじきになること、弱者の犠牲の上に強者が栄えることという意味がある。後者は特に人間世界の現実を指している。強者が弱者を食べるということを扱った作品には「フランドン農学校の豚」「やまなし」「よだかの星」などがあり、搾取を扱った作品には「カイロ団長」「オツベルと象」「ポラーノの広場」などがある。

「なめとこ山の熊」では弱肉強食⁸⁾のこの二つの内容が同時に内包されている。二つのテーマは同一段階では論じられないという見解もあるが、宮沢には同一に捉える視点があった。次の書簡は1918年5月19日に友人の保阪嘉内にあてたものである。

又屠殺場の紅く染まった床の上を豚がひきずられて全身あかく血がつきました。転倒した豚の瞳にこの血がパッとあかくはなやかにうつるのでせう。忽然として死がいたり、豚は暗い、しびれのする様な軽さを感じやがてあらたなるかなしいけだもの⁹⁾の生を得ました。これらを食べる人とても何とて幸福でありませうや。

母とその子が宿屋をいとなみました。立派な人があるとききて停まりました。母はびっくりして自分らの見たこともないものを町からもとめさせ、一生懸命に之を料理し、自分では罰

もあたる程の思いの御馳走をつくりました。御客様は物足りなさそうに膳を終へ、「この辺で鶏があるなら煮て出して呉れ。」と申しました。・・(中略)・・宿屋の子はそれを聞いて泣きたいのでせう。この感を大きくすると食はれる魚鳥の心待が感ぜられます。

ここでは豚であろうと人間であろうと、弱者の気持ちは強者には理解されないのである。そして宮沢は強者にではなく、弱者に自己を同定しようとしている。このような捉えかたの根底には「ベジタリアン大祭」に見るように、人間も動物も長い間の兄弟であるという輪廻転生思想がある。つまり宮沢は動物を殺すことに、人間を殺すことと同じ様な痛みを感じたのである。また搾取と殺生とは異なるようだが、搾取率が高くなれば、人を死に追いやることになる。事実宮沢が生きた時代の東北においては、そのようなことが頻繁にあったのである。したがって小十郎と荒物屋の主人の交渉を副次的テーマとする続橋氏とは見解を異にして、私は荒物屋の旦那の搾取を弱肉強食の問題に包摂して、テーマを捉えたいのである。

大西忠治氏は「作品のはじめの部分よりも、終わりの部分へと移り流れていくに従って主題を支え、主題を語ることに⁹⁾濃密になってくるのである。」と述べている。結末部において小十郎は熊に殺され、<冴え冴えとした笑顔>を残す。この形象を読むことが非常に重要となる。私はこれを仏教的な解脱の象徴と読む。小十郎は弱肉強食の苦しみから、ようやく離脱することができたのである。それを可能ならしめたのは、小十郎の罪に対する深い苦悩、すなわち熊たちへの深い慈悲心であったと考える。

従来「この一篇は『修羅』での闘いであり、死によってそれから脱出した相を描いているので¹⁰⁾す。」というように、<死によって解放された>と論じられることが多いが、私は<慈悲心によって解放された>と読みたいのである。作者は哀れみ深い小十郎を描き、熊に小十郎を殺させ、<冴え冴えとした笑顔>を残させることによって、葛藤や罪の意識から小十郎を解放し解脱させたのである。したがって主題は<慈悲による弱肉強食からの離脱>となり、趣意を<熊を捕ることに罪責感を抱いていた小十郎は、その罪責感を徐々に深め、その深い苦悩すなわち慈悲心によって、解脱し弱肉強食の世界から離脱することができた。>とまとめることができる。

尚作品の通読後、すぐに生徒にまとめさせた主題を記しておく。

(a弱肉強食の係りに生きねばならなかった人の悲しみ・苦しみ b人間の原罪 c人間と動物の運命に対する理解と触れ合い d人間と動物との連帯 e自然の掟・摂理の厳しさ f生あるものの尊厳 g生存のための殺生とそれからの解放 h死と浄化 i人間社会の矛盾・不条理 j因果応報 k人間社会の貪欲さと動物社会の純粹さ)

3 話主

話主とは、享受者に事柄を伝える役のことである。この作品の話主は「私」「僕」として作品に登場する内在話主で、また自分の好き嫌いを判断する主観話主でもある。作品の中に「私」が三回、「僕」が二回出現する。その五例をここで引用してみる。

a 本当は、なめとこ山の熊の胆も私は自分で見たのではない。人から聞いたり考えたりしたこと

ばかりだ。間違っているかもしれないけれども、私はさう思ふのだ。

b それから小十郎はふところからときすまされた小刀を出して熊の顎のところから胸から腹にかけて皮をすうと裂いて行くのだった。それからあとの景色は僕は大きらひだ。

c 僕はしばらくの間でもあんな立派な小十郎が二度とつらもみたくないやうないやなやつにうまくやられることを書いたのが実にしゃくにさはってたまらない。

d それからあとの小十郎の心持ちは、もう私には分からない。

このbcに関して続橋氏は「その作者にして、作中二度も自分の素顔を見せ、『大きい』『しゃくにさはる』というなまの感情をぶつけているのである。」¹²⁾と述べている。中村稔氏はcに言及して、「賢治の憤怒がこれほどあからさまにあらわれている文章はぼくは他にしらない。かれは口ごもってさえいるようであり、たどたどしくさえもある。」¹³⁾と述べている。つまり両者とも「僕」イコール作者と考えているのである。この問題に関してこの作品を論じる多くの論者が同様に捉えている。¹⁴⁾赤祖父哲二氏は新批評に関する論文の中で、「語り手は言語表現上の私、修辞上の私、人前に立った公の私にほかならず、この陰に内心の私が重ね合わせに存在せずして言語表現は成立しえない。」¹⁵⁾と述べている。この赤祖父氏の説を援用すると、この作品において「内心の私」が「僕」として突如出現したと理解することもできる。

これに対して松本議生氏は「二度の場面とも、作者は作中に『素顔』をみせてはいない。」とし、「『私』が『僕』を生み出したともいえるし、『僕』は『私』の分身であるといってもよいのだ。二人とも作者が作り出した語り手なのである。」¹⁶⁾と両者を批判している。

私はこの問題に関して<離れ>という概念を使用して、整理してみたいと思う。小西甚一氏は<離れ>を「作者と享受者あるいは素材との関わり方」¹⁷⁾と定義している。私はこれに作者と話主との関わり方をつけ加えても良いと考える。そうすると「私」よりも「僕」の方が作者と話主の離れが小さくなる。「私」より「僕」を使用するほうがよりくだけた言い方になるから、作者の心情に近い内容を述べているのは「僕」の方だと考えられる。したがって続橋氏や中村氏のような解釈が成立するのである。しかし「僕」を「私」より作者に近い人物とは言えるが、作者と呼ぶことは文芸学上無理である。

ここで宮沢の思想の方面から、この問題について再度考察してみたい。宮沢は毛皮を剥ぐことに生理的な不快感を持っていたと思われる。「猫」（1920年頃）という一ページほどの習作に次のような描写がある。

（私は猫は大嫌ひです。猫のからだの中を考へると吐き出しさうになります。）猫は停つてすわって前あしでからだをこする。見てみるとつめたいそして底知れない変なものが猫の毛皮を網になって覆ひ、猫はその網糸を延ばして毛皮一面に張つてゐるのだ。

そしてすぐ後に「毛皮といふものは嫌なものだ。」と続く。これを参考にすると、動物を殺して皮をはぎ、胃を取り出すというような行為に生理的な不快感を持っていて、それを仏教的な殺生戒が包摂して、宮沢の弱肉強食否定の思想が成立していると考えられる。とにかくbの<僕>の発言には、宮沢の思想が直接的に表明されているのである。

cの発言の場面はせつかく小十郎が手に入れた毛皮を、うまく荒物屋の主人に買ったたかれる場面である。宮沢は搾取を強く否定しており、「カイロ団長」「オツベルと象」「ポラーノの広場」などにそういう思想を表明しているから、cの〈僕〉の発言も作者にとって身を切られるような切実な問題なのである。

宮沢の母方の祖父宮沢善治は煙草・塩・砂糖・石油を扱い、巨万の富を築き、県下一・二を争う多額納税者になった。また百六十町三反という農地と広大な山林を所有していた。¹⁸⁾宮沢は、「宮沢家などは、長いことありませんよ。土地は農民の手に返さないといけません。」とよく言っていたという。このようにcの発言の内容は自分の一族の否定と関わっている。¹⁹⁾

b c共に〈僕〉の発言の内容は宮沢にとって本質的な問題を内包しているのである。

4 導入部の指導

導入部では、時間・場所・人物・事件などの各設定について分析する。

この作品に描かれている時代は、その風俗から考えて作者が生存していた頃と思われる。小十郎の運命に、滅びつつあるマタギの運命が重ねあわされているように思える。続橋氏は作品が書かれたのは1927年頃と推定している。

作中のなめとこ山も大空滝も花巻の北西部の新町に実在する。東北の山間部に場所を設定し、マタギと熊の交渉を描いている。また町に毛皮を売りに行った小十郎が、荒物屋の主人に搾取される。宮沢童話においては町一強者、山村一弱者という図式が成立する。

ディキンソン氏は作品の登場人物に対して、「その性格を明らかにすると同時に脇役に対しては、その役割を明らかにする必要がある。²⁰⁾」と述べている。

小十郎は熊撃ちの猟師で、里人からは相手にされない。罪のない仕事をしたいと思っているが、畑はなく、息子とその妻が赤痢で死に、年寄りと子供ばかりの七人家族を養うために、猟を続けなければならない。この設定は罪のない仕事をしたいのに、猟を止めることができないという動機づけになっている。母子の熊はほのぼのとした無邪気な会話を交わし、人間の親子と同じように描かれている。それを小十郎が聞くことによって、そのような幸福を奪ってきた自分の罪の意識を深めることになる。荒物屋の主人は小十郎から毛皮を安く買い、搾取することによって、熊の犠牲を無意味なものにする。また小十郎や自死する熊との対照的人物となり、小十郎や熊の純粹さを浮かび上がらせる。自死する熊は約束を守って小十郎に身を投げ出す行為により、小十郎を感銘させる。この熊の自己犠牲的行為が小十郎を決定的に動揺させ、死に向かわせることになる。小十郎の母は小十郎の苦しみの理解者として描かれ、葬送する熊はひれふして小十郎を送り、その霊を慰めている。

事件設定とは、大西忠治氏が提唱しているもので、作品の導入部において、事件が主題をより効果的に表わすために仕組まれた設定である。この作品においては、小十郎も熊たちもお互い好意を持っていて、憎みあってはいなかったにもかかわらず、小十郎は家族を養うために熊を殺し続けなければならなかったという設定になっている。悲劇性がこれによって強調されることにな

る。

5 結末部の指導

展開部の指導は「2主題と趣意」のところで述べているので、ここでは省略することにして、結末部の重要事項について、四点論じることとする。

まず次の部分についてである。

「・・・今朝まづ生れで初めて水へ入るの嫌んたよな気がするぢゃ。」すると縁側の日なたで糸を紡いでいた九十になる小十郎の母は、その見えないような目をあげてちょっと小十郎を見て、何か笑うか泣くかするような顔つきをした。

ここで小十郎は死を予感して、それを口にする。小十郎の理解者である母は、「何か笑うか泣くかするような顔」をする。この形象は非常に微妙だが、「笑う」は小十郎が死ぬことによって苦しみから解放され、弱肉強食の世界から離脱できることを喜んでいるように読める。「泣く」は我が子が死ぬことを悲しみ、残されることになる自分と子供たちの生活に対しての不安を表わしていると読める。つまり小十郎の葛藤は母の葛藤でもあったのである。

第二はクライマックスについてである。大西氏はクライマックスを次のように定義している。①事件がもっとも緊張を高めた頂点。②事件(葛藤)が解決から破局へ、あるいは破局から解決へと転化する点。③山場の中の一点。²¹⁾とするとこの作品のクライマックスは、「『これが死んだしるしだ。死ぬとき見る火だ。熊ども、許せよ。』と小十郎は思った。」という部分と考えられる。事件が緊張を高めた点は他にもあるが、破局から解決へと転化する点はこの部分である。導入部・展開部と見てきた小十郎の葛藤が、ここで消滅するからである。小十郎の幸福が死によってもたらされたとは逆説的と言える。

ところでこの場面に関して授業は大いに紛糾した。というのはこの小十郎の死が熊に殺されたものなのか、それとも自死なのかという問題によってである。確かに熊に殺されたと描かれているのだが、小十郎の熊を殺すことへの罪の意識は徐々に深まっていき、自死の熊との出会いの場面では、「・・・もうおれなどは何か栗かしたの実でも食っていて、それで死ぬならおれも死んでもいいような気がするよ。」と言っている。また殺されたのであれば、どうして「熊ども、許せよ。」と言い、<冴え冴えした笑顔>を残しているのか。さらになぜ殺した熊が、小十郎を弔うような行為をしているのかという疑問が生じた。もし自死説をとれば、この作品の主題は<自己犠牲による弱肉強食からの離脱>となる。

これに対して「白沢から峰を一つ越えたところに、一匹の大きなやつがすんでいたのを、夏のうちにたずねておいたのだ。」とあり、小十郎は熊をいつものように殺しに出かけたのであり、自分が死ぬために出かけたのではないという意見があった。また「小十郎は落ち着いて足をふんばって鉄砲を構えた。」とあり、小十郎は実際に鉄砲を撃ったではないかという意見も出された。これには小十郎が鉄砲を撃ったのは、相手に襲わせる為だったという反論もでた。しかし熊は「おまえを殺すつもりはなかった。」と言っており、殺したことを認めている。

梅原猛氏も「小十郎は熊に殺されたのである。」としながら、「熊を殺さねば生きていけない修羅の世界を超えて、熊のために自らを犠牲にしたのを喜んでいるのである。」と矛盾した解釈²²⁾をしている。私は熊に対する罪責感や慈悲心が熊撃ちの名人であった小十郎の腕を誤らせた²²⁾と読んでいます。つまり自死に近い死であるということである。

私はこの問題に関してエンプソンのアンビギュイティ（曖昧）という考え方を援用したい。川崎寿彦氏はアンビギュイティを次のように要約している。²³⁾

言語の多義性は文学作品、ことに詩にあっては単元化することが不可能であること、作品の意味には多くの副次的意味が付随すること、これら多元の意味にさまざまな角度から光がゆらめき、無数の陰影を生じ、それらが総合されたところに作品の全的意味が成立すること。私もこの見解に賛同し、この部分を小十郎が殺されたとも、自ら犠牲になったとも意味をどちらか一方に限定せずに解釈したい。

第三は次の形象である。

思いなしかその死んで凍えてしまった小十郎の顔はまるで生きてるときのやうに冴え冴えて何か笑っているやうにさへ見えたのだ。

この部分の形象を生徒は「一種の聖人」になったとか、「後光がさしたもののような」存在になったと読んでいます。また「幸福」になったとか、「自然と一体化したことの喜び」を表わしているという意見も出た。

和田利男氏は「小十郎の死顔に、冴え冴えとした微笑がのぼっているのは、彼が佛陀と共にある証²⁴⁾であらう。熊どもにとり巻かれた小十郎の死は、私に釈迦の涅槃の図を連想させる」と述べている。

杉浦静氏は小十郎は心ならずも殺し続けなければならなかった熊たちに、許しを乞いつつ死んでゆき、その死の瞬間はこれまでの罪業を悔いた＜正しい＞ものであったとし、＜正しい＞思いで臨終を迎えること、即ち＜臨終正念＞によって、よだかも小十郎も＜生存の罪＞を脱することができ、＜離苦解脱の道＞に入ることができた²⁵⁾と論じている。私も両者のように仏教思想との関連で、＜輪廻からの離脱＞と読みたい。1918年宮沢22歳の時、保阪嘉内宛書簡に次のような記述が見える。

おらは悲しい一切の生あるものが只今でもその循環小数の輪廻をたち切って輝くそらに飛びたつその道の開かれたこと、その道を開いた人の為には泣いたとて尽きない。身を粉にしても何でもない。

宮沢がこの作品を書いたのが1927年頃（続橋達雄）と言われており、書簡が書かれた時期とかなりの年数を隔てているが、宮沢がその死に臨んで『法華経』千部を翻刻して友人知己に分けるように、父に遺言していることから、仏教に対する信仰は終生変わらなかったと思われる。したがってこの形象を＜輪廻からの離脱＞、つまり杉浦氏が述べているように＜解脱した＞と読むのである。それは小十郎の深い苦悩、深い慈悲心によって、そのことが可能となったのである。

第四はラストシーンの異様さについてである。この作品を初めて読んだとき、誰もラストシ

ーの異様さに驚くのではないだろうか。小十郎の死骸を中心に熊たちがひれ伏している。この場面について梅原猛氏は「私はそこに熊のイヨマンテを見るのである²⁶⁾」と述べている。このラストシーンの形象を梅原氏が言うようにアイヌのイヨマンテを参考²⁷⁾にすると理解しやすいのではないかと思う。

イヨマンテとは熊の霊を天に送る儀式で、熊に対する感謝とこれからの豊猟を祈ったものと考えられている。春先に小熊を捕らえ、大切に育てて秋に送る。冬はアイヌにとって山狩りの季節なので、その季節の初めに盛大な祭を行なって、山の神に山の幸を授けてくれるように祈るのが熊祭なのである。小熊は部落の賓客として何日も部落中の歓待を受け、酒や魚や木の実などの土産を持たされて、神の国に送られる。アイヌは動物の肉体を神が人間に持ってくる土産と考えており、天に帰った子熊の話聞いた他の熊たちは、一度自分も人間の世界に行ってみようと思い土産を持って訪れる。

ところで「1素材」で述べたように、マタギにもそれぞれの土地に定まった捕獲儀礼があり、宮沢がどちらを参考にしたかはわからない。しかしマタギの捕獲儀礼では骸に関心を示さない²⁸⁾ということなので、作品に小十郎の死骸にひれ伏す熊たちが描かれている点を考慮すると、やはりアイヌのイヨマンテを参考に形象化したものとしておく。もちろん送るほうと送られるほうとは逆になっている。熊に送らせることによって人間と熊との平等性を主張しているのである。

おわりに

授業では作品の通読後、分析の観点とその定義を示したプリントを生徒に配布し、作品を分析させた。分析批評は教師には、有効な教材研究の方法となるし、生徒には能動的な作業を課することになる。分析批評はもう古いというのが、国語教育界の常識である。しかし私は表現分析を中心に置く分析批評の方法は、文芸教育の原点であると考えている。今後は分析の観点の整備と関連領域の学問の成果を取り入れていきたい。

註

- 1) 小西甚一 「分析批評のあらましー批評の文法ー」 『国文学解釈と鑑賞』1967・2
- 2) 井関義久氏は1972年『批評の文法』を大修館から出版した。また次のように批評という言葉の説明している。
「文学作品に描かれている虚構の世界から、私たちがどうやって生きていったらよいかというような問題を探り出し、それをささえる表現上のすぐれた点を冷静に分析して、そこに隠れている文芸性を探り出すことを、＜批評＞というわけです。」
井関義久『批評の文法<改訂版>』 明治図書 1986 P 46
- 3) 石河純一郎 「二狩人の生活と伝承」 『日本民俗文化体系5 山民と海人』所収 小学館 1983 P 140 P 161

- 4) 和田利男 『宮沢賢治の童話文学 人と作品』 西荻書店 1949 P 43～44
- 5) 続橋達雄 『宮沢賢治・童話の世界』 桜楓社 1981 P 161
- 6) 中村稔 『宮沢賢治』 筑摩書房 1972 P 69 初出1961
- 7) L・T・ディキンソン 『文学研究法』 上野直蔵訳 南雲堂 1969 P 70
- 8) 佐藤通雅氏の次のような厳しい批判がある。

「まず小十郎のかかえる殺生罪をいかに解決するかと言う問題と、安く買いたたく旦那をいかに乗り越えるかと言う問題がここでは錯綜してしまっているはずだ。・・(中略)・・私たちは、二つのテーマはそもそも同一段階で論じられないのだと言うことを知っているし、また賢治の意識に社会性の希薄さを指摘することもできる。もしテーマを別々にして描くなら、いかにもすっきりした作品にすることができたらう。

『宮沢賢治の文学世界—短歌と童話—』 泰流社 1979 P 148～149

- 9) 大西忠治 『文学作品の読み方指導』 明治図書 1988 P 132
- 10) 船木枳郎 『宮沢賢治童話研究』 大阪教育図書 1972 P 134
- 11) 5) に同じ P 161
- 12) 5) に同じ P 159
- 13) 6) に同じ P 69
- 14) 他に古谷綱武「なめとこ山の熊解説」『農民芸術8』 北野昭彦「なめとこ山の熊の作品世界」『宮沢賢治7』 田口昭典「なめとこ山の熊の小十郎の死」『賢治童話の生と死』など
- 15) 赤祖父哲二 「新批評の方法」『解釈と鑑賞』 1976・10 P 61
- 16) 松本議生 「教材論なめとこ山の熊」『日本文学』 日本文学協会 1989・7 P 61
- 17) 小西甚一 「鴨の声ほのかに白し」『文学』 岩波書店 1963・8
- 18) 多田幸正 『宮沢賢治 愛と信仰と実践』 有精堂 1987・7 P 181
- 19) 羽田正 「座談会・賢治素描」 森荘己池『宮沢賢治の肖像』所収 津軽書房 1974
- 20) 7) に同じ P 44
- 21) 9) に同じ P 47
- 22) 梅原猛 『日本の深層—縄文・蝦夷文化を探る—』 佼成出版社 1983 P 81
- 23) 川崎寿彦 「分析批評の方法」『解釈と鑑賞』 1976・10 P 32
- 24) 4) に同じ P 43
- 25) 杉浦静 「なめとこ山の熊」 國文学 1986・5
- 26) 22) に同じ P 80
- 27) イオマンテの具体的な方法については、3) のP 164 を参照のこと。
- 28) 3) に同じ P 141

付記 この論文は第77回全国大学国語教育学会（鳴門教育大学）での発表を元にしたものである。